

伊藤祐二（作曲家）

ユージ 芹に  
気をつける

ジョン・ケージ

「ジョン・ケージ」一九二二年生まれ、一九九二年没のアメリカの作曲家を、どのくらい周知の人として扱ったらよいだろうか。経験的には、「ピアノリストがステージに登場し、一音も演奏せずに終わる『四分三十三秒』という作品の作者」として知っている方に多く出合ったが、作品は、あまり聴いた事が無い、という方が多かった。その評価に至っては、音楽関係者の間ですら「音楽を破壊した人」「コンセプトは面白いが、作品は聴くに値しない」等の否定的評価を実際に耳にした事もある。

音楽なのだから、作品を聴いてもらいたいと思う。本誌読者を念頭に挙げてみると、プリベアド・ピアノ（ピアノの弦の間にポルトや木片などを挟み込む）の為の、例えば「季節はずれのバレンタイン」「マルセル・デュシャンの為の音楽」大曲「ソナタとインターリュード」「プリベアド・ピアノとオーケストラのため

の協奏曲」、いや、もつと普通に「弦楽四重奏曲」「ヴァイオリンとピアノのための6つのメロディ」等は、とても美しい。プラトンの「饗宴」を扱った「ソクラテス」（サティの原曲を編曲）等、比較的初期の作品がなじみやすい。挙げていけばきりが無いが、「ミュージサーカス」や、「ユーロペラ」は、録音で聴くよりライブを聴く（見る）機会があればぜひ。九十年代だつて、ナンバーワークスと呼ばれる作品、例えば、十二本のレインスティック、ヴァイオリン、二台のピアノの為の「FOURS」も素敵。

一方、具体的にケージの作曲過程を見ると、その「方法」が厳密に運用されている。前述の「プリベアド・ピアノとオーケストラ」のための協奏曲」でケージは易経の影響を導入するが、様々な要素を選ぶためのチャート表、易による偶然性を導入するための六四の枠を持つチャート表を用い、根気の要るコイン投げを続けて作曲する。

そして「四分三十三秒」である。この「三つの楽章」からなる作品の楽譜には、音符は書かれておらず、文字による指示があるのみである。奏者は指示の時間だけステージでピアノに向かい、（音は出

さず）そして退場する。ところがケージによれば、「信じてもらえないかもしれないが、チャンス・オペレーションズのチャートを使って長さを決め、一つ一つ沈黙を繋いで曲を書きあげた」（注）のだという。チャンス・オペレーションズの方法によって音を繋ぐのと同様に、沈黙を繋いでいつたというのである。何も弾かない白紙の「楽譜」を作る為に。

これは、現代芸術の病なのか？

それともそこに真理がある？

「ミュージサーカス」の上演現場が、様々な演奏がヒエラルキー無しに同時進行し、カオス状態となり、そしてそれは、あるべき人間社会のモデルである、と語られる事も含め、ケージがいかに革新的であり、それがヨーロッパ前衛の限界を超えるものであったとしても、作品の場を特権的な場と指定してそこにユートピアを見ようという意味で、彼もまた、近代の「芸術家」であったことを再認識、ちよつと安心。

興味がある方の為に、良書を二冊ご紹介。「ジョン・ケージ混沌ではなくアナキー」（白石美雪著、武蔵野大学出版局）「アメリカ実験音楽は民族音楽だった」（柿沼敏江著、フィルムアート社）